

那須純編
輯

初等脩身讀本

卷三

176
3
55

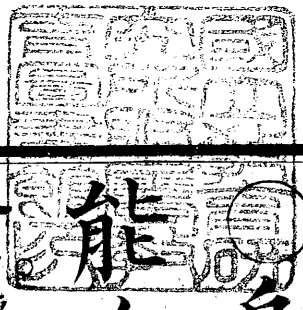
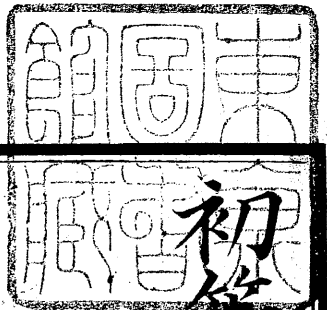
館	大日本教育會書館		
函	二	一	
架	三	二	九
號	五	冊	架

K110.1
107
3

藤澤南岳先生 校閱 那須純一郎編輯
戸谷澹齋先生

初等修身讀本

大坂書肆 敢進堂刊行



初等修身讀本卷之三

藤澤南岳先生

戸谷澹齋先生

校閱 那須純一郎 編

凡子弟たるものは皆
能く自立して世用をな

せ 東萊呂氏

初等修身讀本 卷之三

○事只五分なれば悔な
し。味只五分なれば偏に
美し。續小兒語

○驕て力を恃むことな
かれ。弟子職

○行末の榮へ願わゞ人
の爲め善らん事の數を
積てよ。橘千蔭歌

○奢るものは久しから
ず。平家物語

平家物語

○天地間の人たのれが
心に充滿といふことは
なまきことなり。
悟窓漫筆

○吾身朝夕の俸養は輕
くして身を勞動すべし。
泉道訓

○惡は小なりとも爲す
こなまかれ。
昭烈格言

○善は小なりとも爲さ
ざることなまかれ。
同上

○分に安んじて福を養

ひ。費をはぶきて。財を養

ふ。純正蒙求

○誠は。妄語せざるより

始む。司馬光格言

○心誠なれば。神明之に

應ず。申璧

○人と約するこゝあら

ば。信を失ふべからず。紳瑜

○常に。虚誕を説くもの

は。時ありて。信誠のこと

をいふとも。人之を信ぜ
ず。同上

○過失を聞くこと。父母
の名をきくが如くなら
んことを欲す。馬援格言

○言を寡くせば。謗を省
くべし。省心雜言

○慾を寡くせば。身を保

つべし。同上

○白圭の玷たるは。尚磨

くべし。斯言の玷たるは。

爲すべからず。毛詩

○過ちては。則ち改むる

に。憚かることなかれ。論語

○我身をかへりみをと

めて。つねに。わが過をせ

むべし。家道訓

○禮義を以て。交際れ道

とすべし。省心雜言

○其親を敬せずして。他

人を敬す。これを悖禮と

いふ。孝經

○法とむれば貧にかち。

慎めば災にかつといへ

り。家道訓

○人として情を〜らぬ

は木石に同し。六諭衍義

○我故郷の人にあはぶ。

いとなつかしく親族の

思ひをなすべし。同上

○天道親なく。唯善人に

あたふ。淮南子

○一寸の光陰。輕んずべ

からず。白居易

○讀書百遍。義自ら通ず。童蒙須知

○人一たびすれば。已れ
之を百たびす。中庸

○學は多きにあらず。精

しきにあり。家道訓

○讀書。學問すら所以は。

本心を開き。目を明にし。
行に利あらんことを欲
するのみ。

顏氏家訓

○幼にして。學ぶものは。
日出の光の如し。

同上

○老て。學ぶものは。燭を
秉て。夜行くがごとし。

同上

○事は。勉強にあるのみ。

董子對策

○古人。儉を務むるもの
は。其施とさんかためな

り。童子問

○儉にして施すことを

しらざるものは儉と

ふべからず。同上

○十日。菽粟を分ければ身

亡ふ。

○十年金珠をきても何ぞ

傷まん。續小兒語

○意外の財を貪ること

なかれ。治家格言

○世間第一の好き事は。難を救ひ。貧を憐むに。

くはなまし。 小兒語

○富家一席の酒は。貧漢一年の糧なり。 同上

○我義にあらざれば。銚銖も視ることなかれ。 幼儀 雜歳

○義として。得べきものなれば。千駟も愧ること

なし。 同上

心は腔の裏にあるを

要す。小學

○常の氣象は。從容と

てせまらさず。樂訓

○心閑なれば。歲月長し。
東坡

○人と才能を争ふべか

らず。初學訓

初等修身讀本

初等修身讀本卷之三終

明治十六年一月廿三日

出版權免許

代價五錢

編輯人

兵庫縣士族

那須純一郎

當時大坂府南區順慶町三丁目九番地寄留

出版人

大坂府平民

湯上市兵衛

大坂府南區順慶町三丁目六十番地



弘通

書肆

大坂心齋橋三丁目

大坂北久太郎町

大坂順慶町

西京二條堀川

東京桶町

大坂北濱三丁目

熊本下通町

松原村

柳原

那須

井上

東原

東原

細川

文海堂

積玉園

探海堂

治兵衛

崖堂

流崖

舍堂

那須純編
輯

初等脩身讀本

卷四

176
2
55

大日本教育會書館			
函	架	號	冊
一	二	三	五
九	架	號	冊

東新

K1101
107
4